

性の多様性を考える

性のあり方は、身体的な性、自分が思う自分の性（性自認）、性愛の対象となる性（性的指向）などによってさまざまです。しかし、「性別は男性と女性しかない」「異性愛があたり前」という社会の見方の中で、多様な性のあり方をもつ少数の人々（性的マイノリティ）が、自分らしく生きることができない現実があります。さまざまな違いをもった人が自分らしく生きることができる社会は、誰もがその多様性を認められる社会であることを知り、その社会づくりのためにどのように行動するのかを考えます。

すべての人が当事者意識をもって性を語る社会に

90年代のゲイ・ブームから風向きが少し変わった

1990年代に同性愛を扱った少女漫画をきっかけにゲイ・ブームが起き、それまで日陰に置かれ続けてきた同性愛が陽の当たるところに出てきました。ここ数年は、ゲイであることを売りにしたタレントの活躍が目立ちます。以前はあからさまに差別的な扱いでしたが、最近では才能やセンスのよさがきちんと認められているようです。また、身体の性別に違和感をもつトランスジェンダーは、性同一性障害として広く認知され、性転換が治療として認められるようになりました。性的マイノリティに対するまなざしはかなり変化してきていると感じています。

だからといって、偏見や差別意識がなくなったわけではありません。たとえばメディアでのゲイの扱いは相変わらず笑いの対象です。これは、ゲイが「男性でありながら女性の位置に“転落”した」と位置づけている表れだと考えられます。非常に下品な感覚であり、女性差別でもあります。

社会的活動とともに心のつながりを大切に

私たち「G-FRONT関西」は、1994年に設立されました。具体的には、当事者どうして日頃悩んでいることなどをフラットな形で話し合えるような場の提供や、講演会などを通じて自分たちが考えていることを幅広く伝える活動などを行っています。

差別的なマスコミに対する抗議活動や、政治や行政への

働きかけもおこなってきました。しかし、ただ抗議するだけでなく、成果として残していくことを大切にしています。

「大阪府人権尊重の社会づくり条例（1998年）」にもとづく「大阪府人権施策推進基本方針（2001年）」の制定にあたってはさまざまな働きかけをし、その結果、人権課題のなかに「セクシュアル・マイノリティ」の文言が入れられました。

1994年、東京で「第1回東京レズビアン・ゲイ・パレード」が行われ、「G-FRONT関西」の友人に誘われて参加しました。石を投げられるかもしれないという不安を抱えながらも歩き通した時、深い感動を覚えました。私にとってひとつの誇りとなった経験ですが、誘ってくれる友人がいなければ行かなかったでしょう。そういう意味でもコミュニティには大きな意味があります。単なるネットワークではなく、心と心のつながりのあるコミュニティを目指しています。性は多様であるがゆえに、一過性ではない、地道な活動が必要だと考えて取り組んでいます。

差別解消は、多数派が自らを定義することから

一方で、性的マイノリティに対する差別をなくすためには、すべての人が当事者意識をもつことが必要だと考えます。性的指向／嗜好で線引きするのではなく、むしろ「線引きなどできないのだ」と知ることです。「『多数者』は決して自己が定義を問わない（その鈍感さ）ことによって、何よりも『多数者』なのである」という上野千鶴子さんの言葉があります。他者を「マイノリティ」と定義している段階では、自己を問うていないわけです。私たちがこうして社会に向けてカミングアウトする意味があるとすれば、自己を問うことのない人たちに、「あなたたちは本当に多数派なのか？ なぜそう思うのか？」という問いを突きつけていく鏡になることだと思います。単に性的指向／嗜好ではなく、性そのものについてきちんと話ができる社会になった時に、初めて差別を考える土台ができるでしょう。

G-FRONT関西

<http://www5e.biglobe.ne.jp/~gfront/>
gfront@muh.biglobe.ne.jp



くれいし かずひろ
暮石 一浩さん

G-FRONT関西
運動・研究部部长

パレードを通じて、ともに生きる自分たちの姿を伝えたい

社会にも仲間にも「存在」を伝えるために

性的マイノリティは、人種などに関係なく人口の3~5パーセントの割合で存在するといわれています。人口約883万人の大阪では27~45万人強の性的マイノリティの人たちがいると考えられます。ところが関西には社会に対して自分たちの存在を知らせたり、考えたりしてもらう場がありませんでした。そこで、東京や札幌でおこなわれていた性的マイノリティ主催のパレードを「ぜひ関西でも」という思いが当事者の間に生まれ、2006年から「関西レインボーパレード」が始まりました。

さまざまな色が共存するレインボー（虹）は、レズビアンやゲイ、トランスジェンダー、バイ・セクシュアルなど性的マイノリティのシンボルです。にぎやかに歩くことで、性的マイノリティを「自分の周りにはいない、遠い存在」だと思っている多くの人たちに「あなたの身近に生きていますよ」と伝えたい。同時に、誰にも相談できず、支援を得られずに悩み苦しんでいる多くの当事者に「たくさん仲間がいるよ。あなたは一人じゃない」というメッセージを届けたいという思いもあります。

ありのままの自分でいられる爽快感

私自身、つい最近まで自分がゲイであることを受け入れられずにいました。恋人もいたし、自分の性的指向を頭では理解していましたが、そんな自分をどこか受け入れられなかったのです。「LGBT（レズビアン、ゲイ、バイ・セクシュアル、トランスジェンダー）の家族と友人の会」に参加した時、神戸市民まつりでおこなわれたパレードに誘われたのが大きな変化の始まりでした。ほんのお手伝いのつもりで行ったのに衣装まで用意されており、一緒に歩くことに。歩き始める時には、「職場の人に見られたら」「気持ち悪いと言われるかも」と不安でした。けれども虹色の旗を持ち、性的マイノリティであることをカミングアウトしながら歩くうちに、なんともいえない爽快感になっていったのです。たくさんの当事者の人たちがいることも知りました。そして心から「ありのままの自分でいいんだ」と思えるようになった

のです。この感動を一人でも多くの性的マイノリティに伝えたいと、第2回の関西レインボーパレードでは共同代表を務めました。

地域のイベントとして定着させ、交流を深めたい

異性間の恋愛が「普通」とされる日常生活の中で、息苦しい思いをする場面はいろいろあります。「恋人は？」「結婚は？」という質問を何とかごまかしているという話はよく聞きます。家族にさえもカミングアウトできないことも多い性的マイノリティは、正しい知識や情報を得たり、仲間とつながったりすることが難しい人もまだまだ多いのです。

そのなかでパレードの意義は大きいと考えています。第1回は900人だった参加者が、第2回では1300人となりました。一方で、「ゲイのカラーが強い」という指摘もありました。当事者以外の参加者を増やすことも課題です。一人ひとりが主役であるということを明確に打ち出しながら、地域のイベントとして定着させていきたい。そのなかで、より多くの人に性的マイノリティの実像を知ってもらい、性的指向の違いという壁を超えて友好的な交流を深めていきたいと考えています。

関西レインボーパレード2007実行委員会

<http://www.kansaiparade.org/>
info-krp2007@kansaiparade.org



あきよし
AKIYOSHIさん
 関西レインボーパレード
 2007実行委員会共同代表

「性的マイノリティはみんなの身近にいる」「多くの仲間がいることを伝えたい」というメッセージは、「性別は男女のみ」「異性愛があたり前」という社会の中で、とても力強く響き、生き生きとしています。「ありのままの自分でよい」という意味の大きさを感じました。そしてそれは、「あなたの性は」と、私たち一人ひとりの性のあり方が問いかけてられていると感じました。